

# 友の亡妻に代わって詩を賦す白居易

—元稹の妻韋叢の死とその悼亡唱和詩—

陳 翀

## 一、亡き妻に問いかける元稹

元稹（七七九〜八三二）は、貞元十九年（八〇三）、二十五歳の時に韋叢を娶った。彼女の生涯については、韓愈「監察御史元君妻京兆韋氏夫人墓誌銘」（『韓昌黎文集』巻二十四）に、次のように述べられている。

夫人諱は叢、字は茂之、姓は韋氏。其の上七世の祖父は龍門公に封ぜらる。龍門の後、世よ率ね相繼いで顯官と爲る。……王考夏卿は太子少保を以て卒し、左僕射を贈らる。僕射は裴氏阜の女を娶る。阜は給事中爲り、阜の父は宰相耀卿なり。夫人は僕射に於いて季女爲り。之を愛し、壻を選びて今の御史河南の元稹を得たり。……年二十七にして、元和四年七月九日を以て卒す。卒して三月、其の年の十月十三日、咸陽に葬りて、先舅姑の兆に従ふを得。……實に五子を生み、一女のみ之れ存す。好辭を銘して、以て聞を永にせん。

韋叢は、父は徳宗朝の重臣韋夏卿（七四三〜八〇六）、母は玄宗朝の宰相裴耀卿（六八一〜七四三）の孫娘であり、韋氏と裴氏との二大

友の亡妻に代わって詩を賦す白居易

門閥の血筋を受け継いだ名門の女性であった。寒門出身の元稹が、このような一流貴族の女性を妻に迎えることができたのは、蓋し科擧に上位で及第した彼に、將來政界で必ず活躍するという韋氏一族の期待があったためであろう。ところが、新妻の韋叢は元稹の出世を待たずに、結婚後僅か六年、元和四年（八〇九）七月九日、二十七歳という若さで急逝した。この亡き韋叢を偲ぶために、元稹は三十三首の悼亡詩を書き残しており、現存する『元氏長慶集』巻九に収録されている。その悼亡詩の詩題を列記すれば左記の通りである。

- \* 夜閒 ○二二〇 五律 元和四年
- \* 感小株夜合 ○二二一 五律 元和四年
- \* 醉醒 ○二二二 七絶 元和四年
- \* 追昔遊 ○二二三 七律 元和四年
- \* 空屋題 ○二二四 五律 元和四年
- \* 初寒夜寄盧子蒙 ○二二五 五律 元和四年
- \* 城外回謝子蒙見諭 ○二二六 五律 元和四年
- \* 諭子蒙 ○二二七 五律 元和四年
- \* 三遣悲懷 ○二二八〜〇三三 七律 元和四年

- \* 旅眠 ○三三一 五絶 元和四年
  - \* 除夜 ○三三二 五律 元和四年
  - \* 感夢 ○三三三 七絶 元和五年
  - \* 合衣寢 ○三三四 五絶 元和五年
  - \* 竹簟 ○三三五 五絶 元和五年
  - \* 聽庾及之彈烏夜啼引 ○三三六 雜言 元和五年
  - \* 夢井 ○三三七 五古 元和五年
  - \* 江陵三夢 ○三三八～三三九 五古 元和五年
  - \* 張舊蚊幃 ○三四一 五古 元和五年
  - \* 獨夜傷懷贈呈張侍御 ○三四二 五律 元和五年
  - \* 六年春遣懷八首 ○三四三～三四四 七絶 元和六年
  - \* 荅友封見贈 ○三五一 七絶 元和六年
  - \* 夢成之 ○三五二 七絶 元和九年
- この一聯の悼亡詩の創作経緯について、元稹は「敘詩寄樂天書」  
 「元稹集」卷三十（七七五）に次のように述べている。  
 不幸、少くして伉儷の悲しみ有り。存を撫し往に感じて、數十詩  
 を成し、潘子の悼亡に取りて題と爲す。
- 右の一文から、元稹は悼亡詩の創作において、悼亡詩の開祖である  
 西晉の潘岳（二四七～三〇〇）を意識したことが分かる。元稹の悼亡  
 詩が「三遣悲懷」（〇二二八～〇二三〇）や「江陵三夢」（〇二三八～  
 〇二四〇）という三首連作の形を取ったのは、恐らく潘岳の「悼亡詩  
 三首」を参考にしたものであろう。勿論、妻を亡くした夫の悲しい心  
 情を描寫するという点においても、元稹と潘岳は一致する。例として、  
 「空屋題 十月十四日夜」（〇二二四）詩が挙げられる。題注にも明ら  
 かなように、この詩は元和四年十月十四日、つまり韋叢を埋葬した翌

日の作である。實は元稹は、公務のために、咸陽での妻の葬式に臨む  
 ことができなかったのである。夜、誰も居ない洛陽の家で、元稹はこ  
 の詩を詠じた。

朝從空屋裏 朝 空屋の裏より

騎馬入空臺 馬に騎りて 空臺に入る

盡日推閑事 盡日 閑事を推し

還歸空屋來 還た空屋に歸り來たる

月明穿暗隙 月明 暗隙を穿ち

燈燼落殘灰 燈燼 殘灰落つ

更想咸陽道 更に想ふ 咸陽の道

魂車昨夜回 魂車 昨夜回りきたらんことを

朝、私は馬に乗って、妻の居ない家から御史臺へ虚ろな気持ちで出  
 勤した。一日中とりとめのない事件を處理し、夜またひっそりとした  
 家に歸ってきた。月光は窓を通して暗い部屋の中に廣がり、燈は燃え  
 盡き灰燼が落ちてゆく。更に思いやられるのは、あなたを埋葬した咸  
 陽から、昨夜あなたの靈魂が車に乗って、きつとこの洛陽の舊宅へ歸っ  
 てきたであろうこと。

前半の二聯は、淡々とした語り口ながら、まるで誰かに一日の行動  
 を報告するかのようである。後半の二聯においては、人氣のない部屋  
 に座り込み、茫然自失の心情が表現される。暗闇を照らす冷たい月光  
 と、いよいよ消えてゆく幽かな燈火との對照によって、亡妻を偲ぶ悲  
 しい心情が巧みに表現されている。結句の「魂車」とは、そもそも死  
 者を運ぶ柩車のことを意味するものであったが、唐代には死者の靈魂  
 を載せる車と解釋されていた。詩の末尾に、元稹は妻が埋葬された咸  
 陽から、彼女の靈魂が車に乗って懐かしの我が家へ歸ってくる場面を

思い描いていた。

すでに指摘されているように、従来の悼亡詩は、詩人（夫）の純粹な悲哀の感情世界を構築しようとするのを特徴とし、生前の妻の具體的な面影を語ることは殆ど見られない。例えば、潘岳の「悼亡詩三首」〔『文選』卷二十三〕其一到、

望廬思其人

廬を望みては其の人を思ひ

入室想所歷

室に入りては歷る所を想ふ

帷屏無髣髴

帷屏 髣髴無きも

翰墨有餘跡

翰墨 餘跡有り

このように、亡き妻を語るのではなく、詩人の憂い、悲しみは現在の情景を描寫することによって一層高められる。この點において、前掲の元稹「空屋題」詩は、従来の悼亡詩と一致していた。

しかしながら、このような妻を亡くした悲しい心情だけを詠じる詩は、元稹の悼亡詩においては實に少數である。より多く見られるのは、嘗ての悼亡詩とは異なる新しい一面である。ここで、まず「三遣悲懷」其一（〇二二八）を擧げてみよう。

謝公最小偏憐女

謝公の最小偏憐の女

自嫁黔婁百事乖

黔婁に嫁してより百事乖る

顧我無衣搜蠹篋

我に衣無きを顧みては蠹篋を搜し

泥他沽酒拔金釵

他に酒を沽ふを泥れば金釵を抜く

野蔬充膳甘長藿

野蔬 膳に充たして長藿を甘しとし

落葉添薪仰古槐

落葉 薪に添へんとして古槐を仰ぐ

今日俸錢過十萬

今日の俸錢 十萬を過ぐ

與君營奠復營齋

君が與に奠を營み 復た齋を營まん

貴族の愛娘であるあなたは、私の妻になって一日も良い生活をした

友の亡妻に代わって詩を賦す白居易

ことがなかった。私を着る物もないことを見れば、箆筒から自分の着物を探し出して私のために工面し、私がお酒を飲みたいとねだれば、自分の簪を抜いて酒代に充てる。自分は粗末な野草を食膳にのせ、薪がなければ古槐の下に枯葉が落ちてくることを待ち續けた程である。そのおかげで、今、私の俸祿は十萬を超えた。改めて君のために手厚く供養する、と。元稹は、散文に近い平淡な筆致で、貧困に苦しめられていた韋叢の生身の姿を描き出し、生前の夫婦生活を具體的に詠ずることによって、亡き妻韋叢の清楚な面影を鮮明に浮かび上がらせている。詩における感情描寫は極めて直截的であり、あたかも今日の私小説のような書きぶりである。更に結句において、元稹は亡妻に問いかけ、幽明の境を超えて死者の靈魂と直接對話をしようとしているかのようなのである。

元稹がこのように韋叢の生前の姿を精緻に詠み綴るのは、悼亡詩の創作によって妻の亡魂との交信を果たそうとしていたからではないだろうか。このことは、従来の悼亡詩と較べた場合、最も顯著な相違點である。しかもかかる姿勢は、元稹の夢を主題とする悼亡詩において一層特徴的に示される。例えば「江陵三夢」其一（〇二三八）に、

平生每相夢

平生 毎に相夢みるも

不省兩相知

省て兩に相知らず

況乃幽明隔

況んや乃ち 幽明隔たり

夢魂徒爾爲

夢魂 徒爾に爲すをや

情知夢無益

情に夢の益無きを知るも

非夢見何期

夢に非ざれば 見ふこと何ぞ期せん

今夕亦何夕

今夕は亦た何の夕べぞ

夢君相見時

夢に君と相見るとの時

依稀舊妝服 舊の妝服  
 暗淡昔容儀 昔の容儀  
 不道閒生死 生死を閑つと道はず  
 但言將別離 將に別離せんとすと  
 分張碎針線 碎けし針線を分張し  
 褳疊故幘幘 故き幘幘を褳疊す

と、夢の中で、韋叢は生前と同じく、變わらぬ衣装を身につけ、針仕事に勤しむ姿が描かれている。更に續いて、

撫稚再三囑 稚を撫して 再三囑し  
 淚珠千萬垂 淚珠 千萬垂る  
 囑云唯此女 囑して云ふ 唯だ此の女のみあり  
 自歎總無兒 自ら歎ず 總べて兒無きを  
 尙念嬌且駭 尙ほ念ふ 嬌にして且つ駭なれば  
 未禁寒與飢 未だ寒と飢とに禁へず  
 君復不情事 君 復た 事を情はず  
 奉身猶脫遺 身を奉ずるすら 猶ほ脱遺す  
 況有官縛束 況んや 官の縛束する有れば  
 安能長顧私 安んぞ能く長く私を顧みんや  
 他人生閒別 他人は閒別を生じ  
 婢僕多謾欺 婢僕は謾欺多し  
 君在或有託 君在らば 或は託する有らんも  
 出門當付誰 門を出づれば 當に誰に付すべきと  
 言罷泣幽噎 言罷みて 泣くこと幽噎  
 我亦涕淋漓 我も亦た 涕 淋漓たり  
 驚悲忽然寤 驚き悲しみて 忽然として寤め

坐臥若狂癡 坐臥して 狂癡なるが若し  
 月影半牀照 月影 半牀に照く  
 蟲聲幽草移 蟲聲 幽草に移る  
 心魂生次第 心魂 次第に生じ  
 覺夢久自疑 夢より覺めて 久しく自ら疑ふ

と、亡き韋叢の靈魂が元積に話かけて、娘を心配する母親の心情を夫元積にぶつける。このように、亡妻の面影だけでなく、彼女の細かい感情の浮き沈みまで仔細に表現している。まるで韋叢が元積の心に復活しているかのようである。詩に繰り返される「夢魂」や「心魂」などの表現から、元積には韋叢の靈魂の存在を信じ、夢という形を通して彼女と交信できるという思いがあったことが窺える。詩中に夢での韋叢との死別を、「別離」という言葉を用いて表現していることから、元積は、次に見る夢の中に韋叢と再び逢えることを期待していたものと思われる。

實は元積の三十三首の悼亡詩の内、「追昔遊」(〇二二三)「三遣悲懷」其一(〇二二八)「六年春遣懷八首」(〇二四三)「二五〇」「答友封見贈」(〇二五二)を除き、他の作品は全て夜と關聯がある。元積は、眠れぬ夜に、「感極まれば都て夢無し、魂銷ゆれば轉た驚き易し」(「夜閒」〇二二〇)と嘆き、韋叢を偲びながら一夜を明かし、また、夢で韋叢の靈魂を見た時に、「燭は船風に暗く獨り夢驚く、君を夢みれば頻りに南に向って行くを問ふ」(「夢成之」〇二五二)と詠じているように、夢の中において、韋叢の慰めを求めているかのようである。

夢と現實世界との區別は、元積にとってはただ韋叢が居るか居ないかの違いであった。元積は二重の世界を行き來しつつ、韋叢の靈魂と

交信し續ける。せめて夢の中で韋叢に逢いたい。だが現實に戻ると、悲哀は一層忍び難くなる。妻が亡くなったのを理解しこそすれ、やはり亡き妻に逢いたい。元稹の悼亡詩において、かくも亡妻を具體的な存在として描くという斬新な表現手法を生み出したのは、まさしく妻の靈魂に逢いたいという元稹の強い執念が然らしめたものであろう。

しかも、元稹が悼亡詩の詩型を多様化させたことも、このような新しい題材を自らの悼亡詩の創作に取り込むことに關係があると考えられる。周知の通り、唐に至るまでの悼亡詩においては、五言古詩という詩型で作られるのが一般的であった。六朝詩人は言うまでもなく、盛唐と中唐との境目に活躍した韋應物（七三七？～七九〇？）も、盛唐における近體詩の成熟にも關わらず、その十九首の悼亡詩（『韋蘇州集』卷六）は、殆ど五言古詩である。ところが、前掲の元稹の悼亡詩三十三首は、五言古詩が僅か五首であるのに對し、近體律詩は二十七首（五律八首・五絶三首・七絶十二首・七律四首）を數える。このような構成から見れば、元稹に悼亡詩の詩體を多様化させる意圖があったことは明白であらう。

### 二、元稹の「妻韋叢」に代わって答える白居易

從來あまり指摘されていないが、實は元稹の悼亡詩の殆どは、亡き韋叢に向けた作品であると同時に、白居易（七七二～八四六）に送られたものでもある。元稹の悼亡詩には白居易との唱和を明示していないが、白居易の「見元九悼亡詩因以此寄」（『白氏文集』卷十四〇七一八）という詩題から見ると、元稹の悼亡詩に對して白居易が唱和したことは間違いない事實である。

元稹が送ってきた悼亡詩卷を見て、白居易は次のように應酬した。

友の「亡妻」に代わって詩を賦す白居易

夜淚闌銷明月幌 夜淚 闌に銷ゆ 明月の幌  
春腸遙斷牡丹庭 春腸 遙かに斷つ 牡丹の庭  
人間此病治無藥 人間 此の病 治するに藥無し  
唯冇楞伽四卷經 唯だ楞伽四卷の經有るのみ

この詩は、元和五年（八一〇）の春、長安での作。妻を亡くした元稹は、明月の光を遮った帷帳の中で涙を流し、遠い長安の自宅の牡丹が咲いた庭を思い出しては斷腸の思いにかられる。白居易は、「この人開世界に、亡妻を悼む切ない思いを治す藥はなく、唯一君に勧められるのは、この四卷の楞伽經である」と、亡くなった韋叢に對する無念の思いにとらわれる元稹に對して、佛教に救いを求めることを進言している。

しかも、元和五年以後、元稹が悼亡詩を纏めて白居易に送り續けていたことは、白居易の「答謝家最小偏憐女」（『白氏文集』卷十四〇七六九）詩の詩題の下に施した「元九が悼亡詩に感じ、因りて爲に代はりて答ふ 三首」という自注によって判明する。從來の研究ではあまり注目されていないが、「因りて爲に代はりて答ふ」というのは、白居易は、もはや第三者という立場から唱和するのではなく、自らが韋叢の亡き靈魂に成り代わって元稹と唱和を行うという意味である。元稹が亡き妻韋叢を悲しむ作品を白居易に送り、白居易が亡き韋叢に成り代わって、元稹に返答するという不思議な人間關係が、この唱和詩から見て取ることができるのである。

さて、具體的な内容に踏み込んで、これらの唱和詩を分析してみよう。まず、白居易の「答謝家最小偏憐女」（〇七六九）詩は、前節に舉げた元稹「三遣悲懷」其一（〇二二八）への和作である。

嫁得梁鴻六七年 梁鴻に嫁し得て 六七年

就書愛酒日高眠 書に就<sup>ゆ</sup>り酒を愛して 日高きまで眠る

雨荒春圃唯生草 雨は春圃を荒して 唯だ草を生ずるのみ

雪壓朝厨未有煙 雪は朝厨を壓して 未だ煙有らず

身病憂來緣女少 身病みて憂ひ來たるは 女の少<sup>わか</sup>きに緣り

家貧忘却爲夫賢 家貧なるも忘却するは 夫の賢<sup>わか</sup>に爲る

誰知厚俸今無分 誰か知らん 厚俸 今 分無く

枉向秋風燒紙錢 枉<sup>むな</sup>しく秋風に向ひて紙錢を燒く

ここで、白居易は、「家が貧乏でも、それを忘れられたのは賢明なあなたのおかげでした」と、貧困の中にも心が通い合った結婚生活を

韋叢の代わりに詠い、亡き韋叢の立場から元稹を慰めている。

第二首の「答騎馬入空臺」(『白氏文集』卷十四 〇七七〇) 詩は、

本稿冒頭に引用した元稹「空屋題」(〇二二四)への和詩である。白居易は、亡き韋叢に代わって、埋葬後の心情を次のように綴っている。

君入空臺去 君は空臺に入りて去り

朝往暮還來 朝に往きて暮に還り來たるも

我入泉臺去 我は泉臺に入りて去れば

泉門無復開 泉門 復た開く無し

鰥夫仍繫職 鰥夫は仍ほ職に繫がれ

稚女未勝哀 稚女は未だ哀に勝へず

寂寞咸陽道 寂寞たる咸陽の道

家人覆墓迴 家人 覆墓に迴らん

あなたは役所に出勤して、朝出かけてまた暮れになると戻ってこられるが、私は黄泉に行つて、墓門が閉じれば二度と開くことがない。

妻を亡くしたあなたは相變わらず仕事に没頭しているが、幼い娘は未だ母の私が亡くなった悲しみを抑えきれない。ひっそりと寂しい咸陽

の道を、きつと「家人」(元稹)が「覆墓」(埋葬三日後の墓参)に来て下さるだろう、と。白居易は、公務のために韋叢の埋葬に立ち會えなかつた元稹の悲哀に對して、韋叢の無念と夫の次の墓参に對する期待を吐露する。

最後に白居易が唱和に選んだのは、元稹が元和五年に詠んだ「感夢」(〇二二三)詩である。元稹の原唱は次の通り。

行吟坐歎知何極 行吟坐歎 何ぞ極まるを知らん

影絕魂銷動隔年 影絶え 魂銷え 動ち年を隔つ

今夜商山館中夢 今夜商山館中の夢

分明同在後堂前 分明に同に後堂の前に在り

この詩は、元稹が左遷されて江陵へ向かう途中に、長安の南の商山驛に泊まった時に作った詩である。亡き妻を夢に見た元稹に對して、

白居易は「答山驛夢」(『白氏文集』卷十四 〇七七二) 詩を作つて次のように和した。

入君旅夢來千里 君が旅夢に入らんと 千里より來たる

閉我幽魂欲二年 我が幽魂を閉ぢて 二年ならんと欲す

莫忘平生行坐處 忘るる莫れ 平生行坐せし處

後堂階下竹叢前 後堂の階下 竹叢の前

私は旅路にあるあなたの夢に入るため、はるばる千里もやって來た。私の靈魂は墓に閉じ込められてもう二年になろうとしている。どうか

忘れないで欲しい、閨房の階段の下や竹林の前、嘗て一緒に生活した折々の事を、と。白居易は時間の流れによって、夫である元稹の記憶

に留まっていたい亡き妻の思いを詠じている。更に興味深いのは、結句「後堂の階下 竹叢の前」と、白居易が韋叢の諱「叢」字を詩句に

織り込んでいることである。

更に、悼亡唱和詩と時を同じくする元和五年の秋、元稹が左遷された際に唱和した「夢遊春」唱和詩（元稹「夢遊春七十韻」『元稹集』外集卷一 一〇一〇・白居易「和夢遊春詩一百韻 竝序」『白氏文集』卷十四 〇八〇三）も、實は韋叢と關係する作品として位置付けられる。元稹「夢遊春七十韻」詩は、韋叢との結婚及び死別について次のように詠じている（第六九、八四句）。

朝薨玉佩迎 朝薨玉佩を迎へ

高松女蘿附 高松に女蘿附す

韋門正全盛 韋門 正に全盛にして

出入多歡裕 出入するに歡裕多し

甲第漲清池 甲第 清池漲り

鳴騶引朱輅 鳴騶 朱輅を引く

廣榭舞菱蕤 廣榭 舞 菱蕤たり

長筵賓雜厝 長筵 賓 雜厝す

青春詎幾日 青春 詎幾の日ならん

華實潛幽蠹 華實に幽蠹潛む

秋月照潘郎 秋月 潘郎を照らし

空山懷謝傳 空山 謝傳を懷ふ

紅樓嗟壞壁 紅樓 壞壁に嗟き

金谷迷荒戍 金谷 荒戍に迷ふ

石壓破欄干 石壓して 欄干破れ

門摧舊柱桓 門摧けて 柱桓舊りたり

この一段から見ると、元和元年（八〇六）韋叢の父親韋夏卿が亡くなってから、僅か四年という短い歳月で、韋氏の一族は急速に零落の一途を辿ったことが分かる。白居易の和詩にも、韋家の零落ぶりが次

友の亡妻に代わって詩を賦す白居易

のように具體的に示されている（第一〇五、一〇八句）。

嫁分紅粉妾 嫁して紅粉の妾を分ち

賣散蒼頭僕 賣りて蒼頭の僕を散す

門客思徬徨 門客 思びて徬徨し

家人泣伊嚶 家人 泣きて伊嚶す

また、白居易の和詩の「小兒女を提攜し、將に舊姻族を領せん」とす（第九三・九四句）の一聯にも言及しているように、韋夏卿が亡くなった後、本來は姻戚ながら一族の大黒柱として元稹が韋家一門を支えるはずであった。ところが、元和元年から元和五年の間、元稹には不幸が續く。左拾遺を拜命してから半年も経たず河南尉に左遷され、そして母を亡くして三年の服喪期間に入った。また、元和四年二月、ようやく拔擢されて監察御史として東川（蜀）を巡視するが、五月再び洛陽の御史臺に左遷、更に翌年の三月に江陵土曹參軍に貶められた（末尾の略年表参照）。してみれば、零落する韋氏一門を援助することは、當時の元稹にとっては、難事の極みであった。

しかも、白居易の和詩の前に書き添えている序文に、この唱和の主旨について、次のように言及している。

而今而後、覺路に之返るに非ず、空門に之歸するに非ずんば、將た安くにか反らんや、將た安くに歸せんや。今和する所は、其の章旨卒に此に歸せり。

白居易は、元稹を亡妻の悲しみから解脱させるために佛教信仰を勧めている。このように見えてくると、白居易「和夢遊春詩一百韻」詩は、前に挙げた「見元九悼亡詩因以此寄」（〇七一八）詩と主題を同じくしていることが分かる。従来、「夢遊春」唱和詩は「艶詩」であると説かれていたが、實はこの唱和詩への充分な検討がなされなかった

めの憶測に過ぎない。唱和詩の内容を仔細に検討してゆくと、この詩は決して元積が自分の風流韻事を詠う歌だけではなく、一門を支えきれない悔しさ、愛する妻を亡くした悲しさ、左遷されたことに對する怒り、このような心の底に抑壓されている諸々の思いが詩に込められていることが分かる。この「夢遊春七十韻」詩は、まさしく愛する妻を悼む、人生の窮境に立たされた元積の心の叫びとも言えるであろう。これまでの考證から、元積の悼亡詩は、亡き章叢の靈魂に捧げると同時に、白居易との唱和の役割も果たしていたことが明らかになった。更に、章叢を主題とした唱和は、悼亡詩に限らず、「夢遊春」詩の唱和にも及んでいた。このように章叢をめぐる事柄は、元和四年から元和六年にかけての、元白唱和詩の一貫した大きなテーマであったことが明らかとなるのである。

### 三、元白の家族ぐるみの交友

以上のように見てくると、如何なる理由によって白居易が元積の悼亡詩唱和の相手として選ばれたのか、また、白居易が何故友人の亡き妻である章叢に成り代わったのかという疑問が浮上してくる。死者に成り代わっての唱和、しかも無二の親友の亡妻に代わっての唱和という、今日の一般通念では到底考えられないような代作詩が成立した可能性については、一體どのように考えれば良いのであろうか。

實は、章叢をめぐる唱和は、章叢の生前からすでに行われていた。元和四年の暮春、章叢が亡くなる前、元積は當時の宰相である裴洎に拔擢され、監察御史として東川を巡視することが決定した。そして、東川へ行く途中、元積はたびたび詩を作り、自分の心情を歌って長安にいる友達に送った。これらの詩は、併せて三十二首あったが、白居

易の弟である白行簡が二十二首の七言の律詩と絶句を選び出し「東川卷」(『元積集』卷十七 〇四五三〜〇四七四)に纏めた。白居易はこれらの詩に唱和し、「酬和元九東川路詩十二首」(〇七五七〜〇七六八)と名付けて『白氏文集』卷十四に書き残している。

この唱和詩群を検討してみると、章叢に關聯する唱和詩が含まれていることが明らかになる。まず、「望驛臺」唱和詩から考察してみよう。

望驛臺 三月盡

元積 (〇四七四)

可憐三月三旬足

憐れむべし 三月三旬足り

悵望江邊望驛臺

悵望す 江邊の望驛臺

料得孟光今日語

料り得たり 孟光今日の語

不曾春盡不歸來

曾て春盡きて歸り來たらざんばあらずといふ

を

望驛臺 三月三十日

白居易 (〇七六七)

靖安宅裏當窻柳

靖安宅裏 窻に當れる柳

望驛臺前撲地花

望驛臺前 地に撲つる花

兩處春光同日盡

兩處の春光 同日に盡く

居人思客客思家

居人は客を思ひ 客は家を思ふ

元積詩の第三句の「孟光」は、明らかに自分の妻章叢を指す。中唐の文人官僚が自分の妻を「孟光」に喩えることは、白居易の贈内詩群からも窺える。題注の「三月盡」によれば、この詩は春の最後の三月三十日、元積が東川への巡視の途中で妻の章叢を思い出して詠んだ詩である。第三・四句は、「きつと妻は三月が終わるこの日に言っているだろう、今までは春が終わるこの日に、家に歸って來ないことはなかった」と、章叢の氣持を推測するような歌いぶりである。



そして、白居易は「兩處の春光 同日に盡く、居人は客を思ひ 客は家を思ふ」と返答した。從來の解釋は「居人」を白居易であると捉えているが、實は早くも『文選』に、「居人」は夫を思念する妻を指す用例もあることが分かる。例えば、

\* 居人愁臥、恍若有亡。

江淹「別賦」(卷十八)

\* 居人掩闥臥、行子夜中飯。鮑照「東門行」(卷二十八)

また、白詩の首句に詠われている「靖安宅」は元稹の長安の自宅である。従って、この「靖安宅」に住む「居人」は、紛れもなく韋叢となる。元稹の長安宅の窓際には、今まさに柳が生い茂っており、赴任途中の望驛臺は落花が地一面に散り敷く。二つの場所が遠く離れていても、同じ日に春が終わることに違いはない。ここに住む君の妻は、君のことを思っている、旅に出た君も、彼女を思っているだろう、と。白居易はまるで靖安宅の韋叢の傍に彼女の氣持ちを確かめるかのよう

に、旅先の元稹に應酬の歌を獻じている。

更に、「山枇杷花」唱和詩も同様に韋叢と關聯する歌である。なお、元稹の當該の詩は、現存する『元稹集』には缺落するが、幸いに『詩話總龜』によってその存在が確認される。

其一

深紅山木艶彤雲 深紅の山木 艶彤の雲  
路遠無由摘寄君 路遠く 摘して君に寄するに由無し  
恰似牡丹如許大 恰似も 牡丹の許くの如く大にして  
淺深看取石榴裙 淺深 看取す 石榴の裙

其二

向前已說深紅木 向前 已に説ふ 深紅の木  
更有輕紅說向君 更に輕紅有りて 君に向ひて説ふ

友の亡妻に代わって詩を賦す白居易

深葉淺花何所似 深葉 淺花 何の似る所ぞ  
薄妝愁坐碧羅裙 薄妝 愁坐 碧羅の裙

詩體から見ると、兩首共に七言絶句であるので、七言絶句及び律詩を収録する「東川卷」の編纂基準に反していない。如何なる理由があつて、元稹はこの兩首の詩を「東川卷」から外したのか。實は、詩に歌われている「石榴裙」や「碧羅裙」などの表現は、詩を受け取る相手が女性であることを示唆する。この女性は、白居易の和詩「山枇杷花二首」(『白氏文集』卷十四・〇七五九・〇七六〇)によれば、元稹の妻韋叢であることが明らかになる。

其一

萬重青嶂蜀門口 萬重の青嶂 蜀門の口  
一樹紅花山頂頭 一樹の紅花 山頂の頭  
春盡憶家歸未得 春盡き 家を憶ふも 歸ること未だ得ず  
低紅如解替君愁 低紅 解りて君に替はりて愁ふるが如し

其二

葉如裙色碧綃淺 葉は 裙色の碧綃淺きが如く  
花似芙蓉紅粉輕 花は 芙蓉の紅粉輕きに似たり  
若使此花兼解語 若し此の花をして兼ねて語を解せしめば  
推因御史定違程 御史を推因して 定めて程を違へしめん

第一首の第三句と第二首の結句は(ここでは圈點を附す)、前文に引用した「望驛臺」唱和詩に詠じる韋叢の思いと一致している。つまり、元稹が旅先で山の花を見て、長安に残されている韋叢に對する思いを歌に綴った。そして、白居易は韋叢の氣持ちを代辯して元稹に返答していることが考えられる。悼亡詩に見られる韋叢・元稹・白居易という三人の人間關係の構圖は、韋叢の生前よりすでに形成されてい

たのであった。

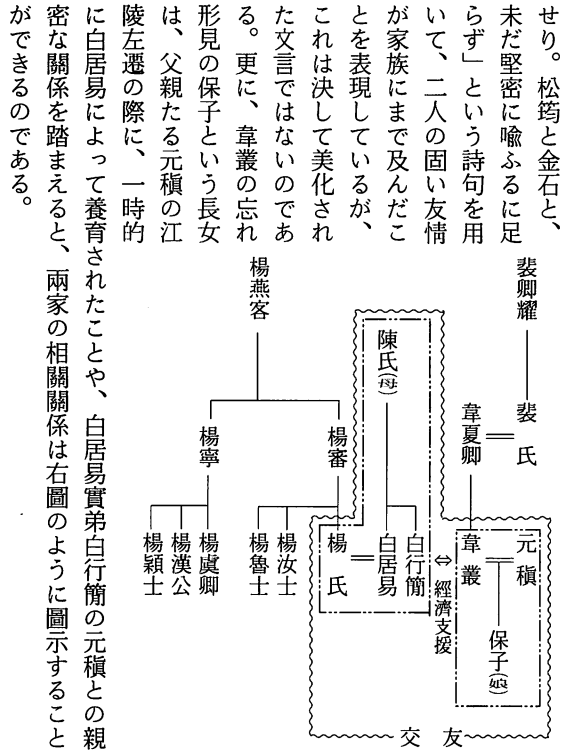
ではなぜ、元積が韋叢に與えたと見られる詩に、白居易が返答したのか。實は當時の韋叢はすでに筆を握れないほど重篤の状態に陥っていたと推測される。なぜならば、白居易の「身病みて憂ひ來たるは女の少なるに緣る」(「答謝家最小偏憐女」○七六九)や元積の「檢し得たり 舊き書三四紙、高低闊狹ほば行を成す」(「六年春遺懷八首」其二○二四四)などの詩句から、常に貧困に苦しんだことと共に、韋叢の健康状態が一向に回復しなかったことが明らかだからである。元積が東川へ赴任したにも関わらず、白居易が頻繁に元積宅に足を運んでいることと合わせて考えれば、恐らく元積は、病氣の韋叢の介護を白居易一家に託したと思われる。東川へ赴任する途中、元積が宿驛ごとに詩を白居易に送ったのは、單に白居易との友情を確かめるだけでなく、韋叢の容體を尋ねるといふ現實的な意味もあつたのであろう。一方、白居易は、韋叢の元積に對する深い愛情を理解し、病牀の韋叢の代わりに彼女の思いを元積に伝えるを試みていたのである。

以上のことから、韋叢が亡くなる前に、すでに彼女をめぐる一聯の元白唱和作品が存在していることが明らかになった。これらの唱和作品を検討することによって、白居易と元積との關係は、從來論じられてきた「文友詩敵」<sup>18)</sup>という交友關係を遙かに超越していたことが分かる。白居易がこのように元積夫婦の感情世界にまで積極的に介入した背景には、二人に共通する家庭を大事にする意識や、妻を愛する觀念が存在していることが考えられる。また一方、唱和詩に示しているように、家庭生活の細部にまで踏み込んだ元白の交友關係を支えた基盤を追究すると、從來重視されなかつた兩家の女性たちの緊密な互助活動が明らかとなってくる。

元和四年の春、元積が長安の家を離れて東川へ赴任する時、病弱の韋叢を白居易に託したことは、通常の社會通念から見れば、元白の間にすでに一方ならぬ親密な關係が存在したことが窺える。だが、更に遡及すると、實は早くも元和元年、韋夏卿が亡くなった直後に、元積一家と白居易一家とはすでに共同生活に近い状態にあつたことが、元積の「祭翰林白學士太夫人文」(『元積集』卷六十○九七六)によって明らかになってくる。祭文中に、次のような文章が記されている。

遂に死生の契を定め、日月の盟す可きに期す。堅きこと金石に同じく、愛は弟兄に等し、毎に捧檄の祿を均しくし、迭ひに循陔の榮を慶ぶ。用て二門の童孺に至りては、廣孝の深情に達せざるは莫し。積東洛に謫居するに逮び、泣血して西歸す、天に告ぐ可き無く、地に依る可き無し。喘息未だ盡きざるに、心魂已に飛ぶ。太夫人 擠蹙の念を推し、絕漿の運を憫れみ、殘疾を問訊し、禮儀を告諭す、旨甘の直を減じ、鹽酪の資を續ぐ。寒温必ず服し、藥餌必ず時あり。

先にも述べたように、韋夏卿が亡くなって以來、元積一家の經濟狀況は著しく逼迫した。この困難の時に、白居易家の女性たちが援助の手を元積に差し伸べた。元白二人の俸祿を合わせて均等に分けて兩家の若い子弟の教育や年寄りの孝養に使う。白居易の母はこのように兩家の生計を纏めて苦勞しながら元白の政治活動を支えていた。元積は祭文において、「遂に死生の契を定め、日月の盟す可きに期す」と、この出來事は二人の友情の原點であると明言している。二人はもはや友人というだけでなく、家族同然と言っても過言ではないだろう。後に白居易は自分と元積との關係を振り返って、「和寄樂天」(『白氏文集』卷五十二二二五八)詩に「旁愛は弟兄に及び、中權は家室比



#### 四、幽明を結ぶ詩歌

元槿が亡き妻韋叢の靈魂に問いかけ、白居易がその韋叢の亡魂に代わって答える。このような奇妙な構圖を確立するに至るのは、まず、前節に論じた元白兩家の家計收支、子弟教育などの物心両面の密接な互助關係が要因の一つとして挙げられる。しかしながら、この幽明を超えた唱和詩の成立には、元白ら唐代知識人層において、ある共通の認識が無ければならないであろう。

元槿が夢を通じて亡き韋叢の靈魂と交信し続けることは、現在の我々にとって荒唐無稽な話であるかもしれないが、當時の知識階層にとっ

友の亡妻に代わって詩を賦す白居易

てはいかにも眞摯で嚴肅な認識であったことは、例えば顔之推（五三一〜五九一）の『顏氏家訓』歸心篇に見える。

釋の五に曰く、形體は死すと雖も、精神は猶ほ存す。……世に魂神有り、夢中に示現し、或は重妾に降り、或は妻孥を感ぜしめ、飲食を求索し、福祐を徵須すること、亦た少からずと爲す。

靈魂と交流できるという發想は、そもそも佛教の輪廻思想に基づいた靈魂不滅の説によるものであると言われている。『顏氏家訓』は、一般的な怪奇小説と異なり、子孫に學問や禮教を教える教訓書である。この書に記されていることは、當時の知識人の基本教養とも言える。だとすれば、時代はやや下がるが、白居易がこの悼亡詩唱和において、終始元槿に佛教信仰を勧めたことも、元槿の靈魂不滅信仰を充分に理解した上での提言であろう。

悼亡詩を作り死去した人の靈魂に語りかけることは、從來の悼亡詩に見られない現象である。だが、死者の靈魂を招き返す風俗は古く中國に存在している。靈魂に問いかけることを詠唱する文學の淵源は、『楚辭』の招魂篇まで遡ることができる。時代を下り、豐富多彩な中國の哀傷文學において、『楚辭』の傳統を繼承したのは、悼亡賦の系譜であった。『漢書』卷九七上「李夫人傳」に抄録する漢の武帝劉徹（前一五〜前八七）が作った李夫人を悼む賦に、李夫人の亡き魂について、次のような表現が見える。

包紅顏而弗明　紅顏を包みて明らかならず  
 嚙接狎以離別兮　接狎を嚙ぶも以て離別す  
 宵寤夢之芒芒　宵に夢の芒芒たるより寤むれば  
 忽遷化而不反兮　忽ち遷化して反らず  
 魄放逸以飛揚　魄　放逸して以て飛揚す

何靈魂之紛紛兮 何ぞ靈魂の紛紛として

哀裴回以躊躇 哀しみ裴回して以て躊躇する

また、悼亡賦とは別に、唐代において死者の靈魂を祭る文章として發達していた祭文にも、注目すべきである。祭文とは、直接に亡き人の靈魂に話しかけるといふ形で作られた文章である。白居易の「魂兮有知」(「祭符離六兄文」)『白氏文集』卷二十三(一四四六)や韓愈の「有知而聞」(「祭十二郎文」)『韓昌黎文集』卷二十三などの文例から、死者の靈魂の存在を認めることは、すでに個別的な宗教の枠を越えた、唐代知識階層の共通認識であつたと考えられる。

このような思想形態の影響を受け、「靈語」といふような死者との會話を表す俗語も出現しており、かつ頻繁に、廣く唐代の文獻に使用されている。また、唐代の小説においても、靈魂との交流を題材とした説話が多く見られる。『太平廣記』卷三三三二所引、唐の陳劭の『通幽記』に見える唐暉の逸話は、その好例である。物語の筋書きは次の通り。

唐暉は開元時代の人である。彼の妻は早くに亡くなったが、彼は依然妻を愛していた。ある日、彼が悼亡詩を作つて亡き妻を偲んでいると、突然、女の泣き聲が聞こえた。彼は女に聲をかけると、亡き妻の靈魂であると言ふ。彼は妻の亡魂と再會し、長い時間話した。のち亡き娘の靈魂も登場し、最後には、詩と贈り物を交して別れを告げた。

亡き妻を忘れないために夫は悼亡詩を作つて妻を偲ぶ、一方、亡き妻は夫の眞情に感動して靈魂という形で現れ、二人は再會を果たす。これはまるで元稹の悼亡詩そのものである。

以上論述したように、悼亡詩の創作において、元稹はジャンルの垣

根を越え、悼亡賦・祭文・傳奇小説等の様々な文學の要素を融合し、亡き妻を悼亡詩を受け取る對象とし、妻の靈魂に問いかけるといふ新しい系譜を作り上げた。かかる時代背景の影響を受け、この悼亡詩において見せた全く新しい展開は、元稹の章叢に對する深い愛情があつてこそ、確立できた文學現象であると言えよう。このような文學における眞情の吐露を尊ぶ思想は、まさしく絢爛多彩の中唐文學の底邊に流れる時代の主潮であつたに違いない。

しかも、白居易自身、元稹の悼亡詩よりも早く、すでに生死を超え、夫婦の純愛を詠じていた。「長恨歌」(『白氏文集』卷十二〇五九六)に歌われている「天に在りては願はくは比翼の鳥と作り、地に在りては願はくは連理の枝と爲らん」といふ表現は、中國古典文學における生死を乗り越える夫婦愛の最高表現であることは、いまさら贅言を要しないであろう。更に、歌の前に附録された陳鴻の「長恨歌傳」に、「願はくは世世夫婦と爲らんと」と、今生ばかりか來世に亘る夫婦の愛情を主要なテーマとしていたことは明白である。作品の構成から見ても、白居易は初めから、李楊二人の戀を幽明の境を異にする夫婦の永遠の愛情として詠じようと構想を固めていたことが推測される。七夕の夜の長生殿での誓い、「長恨歌」の眼目とも言える最も重要な描寫は、正に李楊二人が身分の壁を越えて夫婦として結ばれることを強調するために設定した虚構であろう。更に、詩の後半には、仙界にいる亡くなった楊貴妃からの玄宗に對する變わらぬ愛情が、大いに贊美されていることも明瞭である。妻(楊貴妃)との死別は、たとえ人間社會に君臨する玄宗にとつても、決して耐え得るものではない。だが、もし互いに眞心を信じていれば、必ず幽明の境を越えて永遠に愛し合える。このように、李楊故事は、白居易「長恨歌」の出現によって、

玄宗から楊貴妃へ一方的に向けられた寵愛の域を超越し、夫婦として死と生を超えた永遠の愛情を追い求める悲戀純愛に昇華された。「長恨歌」において、白居易は臨邛道士を人間世界の玄宗と仙界の楊貴妃との橋渡し役として作品に織り込んだが、現實で起こった元稹夫婦の死別の際に、白居易は自ら臨邛道士の役を演じた。妻を亡くした元稹の悲しみを最も理解できたのは、まさしく家族同然の白居易をおいて他にない。

注

- (1) 「夫人諱叢、字茂之、姓韋氏。其上七世祖父封龍門公。龍門之後、世率相繼爲顯官。……王考夏卿以太子少保卒贈左僕射。僕射娶裴氏臯女。臯爲給事中、臯父宰相耀卿。夫人於僕射爲季女、愛之、選婿得今御史河南元稹。……年二十七、以元和四年七月九日卒。卒三月、得其年之十月十三日葬咸陽、從先舅姑兆。……實生五子、一女之存。銘于好辭、以永於聞。」
- (2) 本稿に引用した元稹詩は冀勤點校『元稹集』（中華書局一九八二年）を底本とし、作品番號は花房英樹『元稹研究』（彙文堂一九七七年）による。白居易詩は、四部叢刊所收那波本『白氏文集』をもとに、適宜諸本を参照し、作品番號は花房英樹『白氏文集の批判的研究』（彙文堂一九六〇年）による。作品編年については、前掲花房氏の二書、朱金城『白居易集箋校』（上海古籍出版社一九八八年）、楊軍『元稹集編年箋注』（三秦出版社二〇〇二年）を参照した。
- (3) 「不幸少有伉儷之悲、撫存感往、成數十詩、取潘子悼亡爲題。」
- (4) 元稹が韋叢の埋葬に参加できなかったことについて、詳細な考證は陳寅恪『元白詩箋證稿』第四章「艷詩及悼亡詩」（古典文學出版社一九五

友の亡妻に代わって詩を賦す白居易

八年）を参照。

- (5) 『儀禮』「既夕禮」、「薦車直東榮北靦。（漢・鄭玄注）進車者、象生時將行陳駕也。今時謂之魂車。（唐・賈公彥疏）以其神靈在焉、故謂之魂車也。」
- (6) 元稹までの悼亡詩に關する先行論文は、前掲注(4)のほかに、高橋和巳「潘岳論」（『中國文學報』第七册一九五七年）、山本和義「元稹の艷詩及び悼亡詩について」（『中國文學報』第九册一九五八年）、深澤一幸「韋應物の悼亡詩」（『颯風』第五號一九七三年）、入谷仙介「悼亡詩について——潘岳から元稹まで」（『入矢教授・小川教授退休記念中國文學語學論集』一九七四年 筑摩書房）等がある。
- (7) 「燒」、那波本は「吹」に作る。金澤本によって改める。
- (8) 唐の段成式撰『酉陽雜俎』續集卷七に「公安潯林村百姓王從貴妹未嫁、常持金剛經。唐貞元中忽暴病、卒、埋已三日、其家覆墓。」また清『浙江通志』卷九十九に「合窆始歸、閏三日、展祭新阡、謂之覆墓。」
- (9) 更に後にも、白居易は元稹に與える詩に韋叢の諱をしばしば織り込んでいる。例えば、「晚叢白露夕、衰葉涼風朝」（『秋題牡丹叢』卷九〇四一五）、「燕影動歸翼、蕙香銷故叢」（『感秋寄遠』卷九〇四四五）、「影滿衰桐樹、香凋晚蕙叢」（『秋寄微之十二韻』卷二四二四二七）などである。また、晚唐の范攄『雲谿友議』卷下「艷陽詞」に「初娶京兆韋氏、字蕙藥、官未達而苦貧」と記することによれば、「蕙叢」は韋叢の字である。韋叢は秋に死去したため、秋になると白居易は韋叢を悼む詩を元稹に送り続けていた。
- (10) 「而今而後、非覺路之返也、非空門之歸也、將安反乎、將安歸乎。今所和者、其章旨卒歸於此。」
- (11) 「夢遊春七十韻」詩を艷詩として捉えたのは、南宋趙德麟『侯鯖錄』卷五「辨傳奇驚駭事」に引用した王銍「傳奇辨正」を嚆矢とする。後、陳寅恪がこれを襲用することに至って定論となっていた。前掲注(4)

を参照。しかし王銍「傳奇辨正」に、元詩の前半の三十六韻（夢での戀愛）しか記載されなかったことや、詩題が「夢遊春詞」と改竄されたことから見ると、詩の内容を十分に検討していなかった可能性がある。

- (12) 小南一郎「元白文學集團の小説創作」(『日本中國學會報』第四十七集一九九五年)では、この「夢遊春」詩の前半は「鶯鶯傳」をもとにして自らの戀愛體驗を追想するものであり、後半では一轉して、名門の娘を娶りつつも官僚としての浮き沈みを経るさまを述べるという読み方を示す。しかし、そもそも「鶯鶯傳」が元稹の私小説であるのかということについては、すでに内山知也「鶯鶯傳の構造について」(『日本中國學會報』第四十二集一九九〇年)にも疑問が提出されており、また筆者は、夢遊春唱和詩が作られた背景を踏まえて、當該の詩は名門の娘を娶る願望(夢)↓章叢との結婚(夢の實現)↓妻との死別及び官途の浮き沈み(夢の破滅)というような読み方をとるべきであると考えている。
- (13) 使東川唱和詩成立の経緯については、元詩及び白詩の序文に明確な説明が施されている。元詩の序文は次の通り、「元和四年三月七日、予以監察御史使東川。往來鞍馬閒、賦詩凡三十二章。祕書省校書郎白行簡爲予手寫爲東川卷、今所錄者、但七言絕句長句耳。起駱口驛、盡望驛臺、二十二首云。白居易の序文は次の通り、「十二篇皆因新境追憶舊事、不能一曲絃、但隨而和之、唯餘與元知之耳。」
- (14) 平岡武夫「白居易とその妻」(『東方學報』第三十六册一九六四年、のち同氏著『白居易—生涯と歲時記』朋友書店一九九八年刊に収録)、中原健二「詩人と妻—中唐士大夫意識の一斷面」(『中國文學報』第四十七册一九九三年)、姜若冰「贈内詩の流れと元稹」(『中國文學報』第五十九册一九九九年)等を参照。
- (15) 岡村繁『白氏文集三』(明治書院一九八八年)卷十四を参照。
- (16) 『詩話總龜』卷二十七「寄贈門」。なお、初めてこの唱和詩の存在を指摘したのは、前掲注(2)楊軍箋注本である。
- (17) また、韓愈の墓誌銘の「實生五子、一女之存」という記載によれば、六年の結婚生活の間に、章叢は五人の子供を産んだが、四人が亡くなったことが分かる。ここから章叢の健康状態があまりかんばしいものではなかったことが推測される。
- (18) 金在乘「白居易と元稹」(『白居易研究講座 第二卷』勉誠社一九九三年)を参照。
- (19) 「夫妻偕老」という家庭意識は、中唐文人官僚の共通意識の一つと見られている。前掲注(14)平岡論文を参照。
- (20) 「遂定死生之契、期於日月可明。堅同金石、愛等弟兄、每均捧檄之祿、迭慶循陔之榮。用至於一門之童孺、莫不達廣孝之深情。逮積謫居東洛、泣血西歸、無天可告、無地可依。喘息未盡、心魂已飛。太夫人推擠壑之念、憫絕漿之遲、問訊殘疾、告諭禮儀、減旨甘之直、續鹽酪之資。寒溫必服、藥餌必時。」
- (21) 「釋五曰、形體雖死、精神猶存。……世有魂神、示現夢想、或降童妾、或感妻孥、求索飲食、徵須福祐、亦爲不少矣。」
- (22) 中國の中世において、靈魂の存在は民衆に廣く信じられていた。このような靈魂觀については、從來、道教信仰によるものと見なされていたが、Stephen F. T'oussar(中譯名：太史文)は、道教文獻における「鬼節」傳説が、實は佛教話の影響を形成されたものであることを指摘する。詳細は、氏の論著*The ghost festival in medieval China*, Princeton University Press, 1988(中譯本：侯旭東譯『幽靈的節日：中國中世的信仰與生活』浙江人民出版社一九九九年)を参照。
- (23) 後藤秋正『中國中世の哀傷文學』(研文出版一九九八年)及び『唐代の哀傷文學』(研文出版二〇〇六年)を参照。
- (24) 羅維明「唐代詞語拾話」(『唐研究 第二卷』北京大學出版社一九九六年)を参照。
- (25) 陳劭は德宗朝の人である。李劍國『唐五代志怪傳奇叢錄』卷下「通幽

